それぞれの道

悪霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それぞれの道

【Ｎコード】
Ｎ５０３４Ｆ

【作者名】
悪霊

【あらすじ】
同じ中学校を卒業した４人組。高校でのそれぞれに道を描いた物語です

登場人物&プロローグ

泉こなた・・・・
年齢：１６歳
身長：１４３ｃｍ
出身地：埼玉県
誕生日：５月２８日
血液型：Ａ型
利き手：両手利き
髪の色：青紫（青と省略する）のロングヘア
家族構成：父、☆長女
漫画、ゲームに影響されやすい女の子。
運動能力は高いがそれをまったくいかそうとはしない

柊つかさ・・・・
年齢：１６歳
身長：１５５ｃｍ
出身地：埼玉県
誕生日：７月７日
血液型：Ｂ型
利き手：左利き
髪の色：ライトパープルでショートヘア
家族構成：父、母、長女、次女、三女、☆四女
お人よしで場の空気に流されることが多い女の子
料理が好きで調理師を目指している

柊かがみ・・・・
年齢：１６歳

身長：１５６ｃｍ
出身地：埼玉県
誕生日：７月７日
血液型：Ｂ型
利き手：左利き
髪の色：ライトパープルのロングヘア
家族構成：父、母、長女、次女、☆三女、四女
思考が普通で主にこなたやつかさに突っ込んでいる女の子
本人は否定しているがツンデレである

高良みゆき・・・
年齢：１６歳
身長：１６２ｃｍ
出身地：東京都
誕生日：１０月２８日
血液型：Ｏ型
利き手：左利き
髪の色：ライトピンク
家族構成：父、母、☆長女
容姿端麗、成績優秀で優等生だが天然系な女の子
完全超人＆歩く萌え要素

ここからはオリジナルキャラクターです。

堺雅人・・・・・
年齢：１６歳
身長：１９９ｃｍ
出身地：神奈川県
誕生日：５月１８日

血液型：Ｂ型
利き手：左利き
髪の色：緑色
家族構成：父、母（海外で豪遊中）、長男、長女、☆次男
いつもマイペースで明るい性格の男の子。
純真な性格ゆえに結果的に孤立することが多い。

宮川佑樹・・・・
年齢：１６歳
身長：１９８ｃｍ
出身地：神奈川県
誕生日：７月２１日
血液型：Ｏ型
利き手：左利き
髪の色：ブラウン
家族構成：父、母（海外で豪遊中）、☆長男、
自分を持った愛情のある男の子。
負けず嫌いだが負けるととことん落ち込んでしまうことが多いらしい

長門蓮・・・・・
年齢：１６歳
身長：２０１ｃｍ
出身地：神奈川県
誕生日：１１月１１日
血液型：Ａ型
利き手：両利き
髪の色：赤
家族構成：父、母（海外で豪遊中）、長女、☆長男、次男
努力家で人からの人望も厚く中心的な存在となることが多い男の子
厳格主義っぽい中に思いやりと優しさが隠されている

長門進・・・・・
年齢：１６歳
身長：２００ｃｍ
出身地：神奈川県
誕生日：１１月１１日
血液型：ＡＢ型
利き手：両利き
髪の色：水色
家族構成：父、母（海外で豪遊中）長女、長男、☆次男
二重人格的に思われたり、変わり者扱いされることが多い男の子。
外見だけではなく内面も深く見ないと分からないことが多いが
人から頼りにされるとほうっておけないタイプである。

「やっとこの学校ともサヨナラだな・・・・・」

結局3年間つまんなかったな・・・・」

進は学校を見ながらつぶやいていた。

「なーに自分1人でつぶやいてんだばーか」

「さっさとしないとおいてくぞ進」

「待てよみんな」

俺らは進、蓮、佑樹、雅人。

小学校時代からの親友だ。

で、今日は高校の1学年修了式。

なぜか知らねぇけど高校も全員同じだ。

神のいたずらか？まぁどうでもいいが・・・

2年でこそおもしれぇことがあるといいな。

登場人物&プロローグ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております

第1話

「あ～あ、新しい高校生活2年目だが学校に行くのは
はてしなくだるいなぁ」
進は歩きながら言った。
「そんな事言ったってしょうがないだろ」
「へいへい」
相変わらず兄貴は堅苦しいな・・・・
俺は長門進。兄貴と言ったのが長門蓮だ。
後ろにいるのは堺雅人と宮川佑樹だ。
俺たちは小学校から同じだから顔は知っている。
まぁいっちゃあなんだが全員モテる。全員告白されたことがあるが
断っている。
なぜかって言うと、あんまし興味がねぇから。
それと可愛くねぇから。
「おい！聞いてんのか進？」

「ん？あ、悪い佑樹まったく聞いてなかった。」

「てめぇ、マジふざけんなよ。つか今日の料理担当お前だぞ。」

「あぁ、もう回ってきたのか。」

おっと2つ説明し忘れてた。

俺ら4人は全員同じ家に住んでる。なぜかって？

それはあとで説明するってことにしといて

とにかくこれの事情もあとで説明するが俺らは1週間ごとに料理当番って奴を決めて

順番に回してる。

「じゃあ今日買って帰らねぇとな」

「進の料理はうまいからね」

雅人がほめてきた。

ったく、そんなお世辞言っても褒美なんて出ないぜ？

ってそんなことを話してると学校に着いた。

ー陵桜学園ーか・・・

俺たちは学校に着くと早速目立ってた。

なぜかって？身長が高いから。

一番小さい佑樹でも１９８ｃｍある。

まぁ、そんなに高くなくてもいいがいいことはある。たとえばクラス分けのとき

背が高いと多少離れてても確認できる。

俺たちは例によってその身長を生かしてクラス表を確認した。

で結果は・・・・全員Ｂ組だ。ちなみに前回は全員Ｄ組だった。

まったくどうしたらこんな偶然が出るのかは知ったことではない。

さっさと教室に行こうとして振り返ったとこで俺は誰かとぶつかった。

髪は青い。どうやら女子みたいだな。

俺はそいつに「わるい。」と言って手を貸し立たせてやった。

そいつは俺を見上げていたが突然笑い出した。

俺は訳が分からず頭に？マークを浮かべた。すると青髪の女子が

「ねぇ、その身長を生かしてクラス表見てくれない？」

そういった瞬間後ろからその子に拳が振り下ろされた。

「そんなこと言ってサボろうとしてるだけでしょ！あんたは・・・」

「それにしても大きいねぇ」

ライトパープルにショートヘアの女子が俺に言ってきた。

とそんなことをやっていると兄貴達が

「お～い、進早く行くぞ」

とこっちに言ってきた。

「ほらこの人行くからさっさと見に行くよ」

「えぇ、いいじゃんねぇお願い」

あ～あ、俺ってなんでこういうときに人に頼られると断れないんだろうな・・・

「悪い、先教室行ってて」

と兄貴達に伝えた。それを聞くとさっさと行ってしまった。

「じゃ見るから名前教えてくれないかな？」

「私は柊かがみ、でこいつが泉こなたでこっちにいるのが柊つかさと高良みゆきよ」

俺はクラス表を見て確認してゆくとなんと全員同じクラスではないか。

しかもB組だ。おいおいマジで神のいたずらなんじゃねぇのかこれ

「どうだった？」

「全員B組だな」

すると柊妹から歓喜が上がった。

「やった！お姉ちゃん一緒だね！」

「うん、そうね。ありがとう、え～と・・・」

「あ、長門進だ」

「ありがとう長門くん。じゃあね」

といって4人はB組の方向へ向かっていきました。

俺はそのあとを追っていった。

「ちょっと待って。一緒に行かねぇか？」

「え？なんで。まさか女子と歩くのが夢だったとか・・・？」

「違げぇよ！！え～と俺もB組だからさ」

「あ、そうなんだ。じゃ1年間よろしくね」

泉がそういってきた。

と言ってB組までの間に名前の呼び方、メアドを交換した。

この時、なんでメアドを交換したのかと俺はあとで後悔することになる。

一応、柊姉、柊妹、泉、高良と呼び

俺は進くんと呼び合うってことで終結した。

ハァ、俺の高校生活はこえからどうなっていくんだろうか・・・

少し心配になってきたな。

教室に入り、時計を見るともう8時25分。席割りの紙を見る余裕もなさそうなので

兄貴達を見るとすでに確認してたらしくその席を指差している。

まぁ、だいたいの席を説明すると女子は分からんが

俺が窓側一番後ろ、その前に佑樹、窓側から2番目の1番後ろに兄貴

その前に雅人だった。なんかもう突っ込む気にもならないが・・・

とにかく女子は誰だろう・・・?と考えてるとなんか聞いたような声がする。

まさか・・・。隣を恐る恐る見ると泉だった。なんでこうなるんだろうか・・・・・

しかも佑樹の隣に柊姉、兄貴の隣に柊妹、雅人の隣に高良だった。

神様・・・・なにもここまでしなくても・・・・・

俺はここまで来たら絶対良くないことが起こるんだろうなぁと感じていた。

第1話（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第2話

あ～あ、なんでこんな変なことになってんだろうか・・・・

俺は始業式の校長のつまんねぇ話をスルーして考えていた。

おいおい、マジでしゃれになんねぇぞ。

なんでクラス表を見てあげたぐらいでこんなことするんだよ！？神様

こんなふうに考え事をしているとふと疑問に思った。

あれ？でもこなたさんって・・・どこかで見たような気がするな・・・

どこだっけ？あぁ、マジ考えても思いださねぇのは腹が立つな

ってもう校長の話終わってるし・・・・。さぁ教室に戻るか

俺らはクラスごとに教室へと戻る。

めんどくさいがこっから1時限勉強だ・・・・

まぁ、だいたいは自己紹介で終わりなんだけどな・・・・

つか1時限ならやんないで家に帰らして欲しいもんだな

で、その1時限目は世界史か。まぁ俺が気にすることじゃねぇ
だいたい普通にやってたら4とかとることねぇだろ
5とって当たり前だと思ってる。
で、隣を見ると・・・・ゲームしてるし。俺は小声で話しかけた。
「ゲームしてるけど、面白いのか？」
「うん、面白いよ。やってみる？」
「うん、やる」
ゲームしてたら4になるって？心配するな
俺はこういう類のゲームとか本を授業中に見てて
ばれたことは一度もない。それで5なんだから楽なもんだよな。
佑樹も兄貴も雅人もこっちをちらっと見たがすぐ前を向いた。
俺はゲームを受け取り、ゲーム画面を開いた。
なんだ？このゲーム内容・・・・。
キャラを選んでください？で、出てきたのが・・・・
まぁ、これは読み手の方に任せるか・・・とりあえずこいつだな。

ん？どんな内容かって？

俺が選んだキャラをコスプレさせたりとかだろうな・・・

と言う風にしてゲームをしてるとあっという間に授業が終わった。

とりあえず返すか・・・。俺はまた小声で

「ありがとう。」

と言って返した。終わったし、帰るか。

で時間をすっ飛ばしてただいまの時刻３時・・・

俺らは家にさっさと帰ってきて各々好きな時間を部屋で過ごしていた。

だが俺には今日、これから１週間分の食材を買いに行くという仕事がある。

俺は家を出て、近くの店まで行った。

まぁ、近くつっても徒歩で３０分ぐらいってとこだろうな。

俺は一通り食材を買うと店を出て、来た道を戻っていると

なんかつけられてる気がするな。ちらっと気づかれないように後ろを見ると

見たような顔が４人ぐらいいる・・・

俺はしばらく歩いて、１つの曲がり角の手前でダッシュして横に曲がった。

後ろからこっちに走ってくる音がする。曲がった後すぐ止まって角のとこにいると、

案の定曲がってきた。そいつは俺にぶつかって倒れそうになったんで倒れないように

背中を支えて起こしながら、

「お前ら、なにしてんだよ・・・・」

後ろから来たほかの３人も含めていう。

「いや～、ばれちゃったね☆」

「ばれちゃったじゃねぇよ！！」

泉、柊姉、柊妹、高良だった。

「で？何してたんだよ」

俺がそう聞くと、柊姉が

「今日の朝のお礼したかったから本当は言えばよかったんだけど・・・・」

「あ、そうなんだ」

「だから今から進くんの家行ってごはんを作ってあげようかと・・・・」

俺が答えた後、柊姉が続けて言う。

どうするかな・・・・まだ俺らの事知らないからなぁ～

かといって断るのも悪いよなぁ。ま、いいか・・・

作ってくれてるって言うんだし

「じゃ作ってもらおうかな・・・・」

「いやぁ、やっぱ進くん。フラグ立てのことが分かってるね☆」

「うるせぇ！さっさといくぞ」

俺は歩いていく。すると高良が

「ずいぶんと買っていますね」

「ん？おう・・・これか？まぁな」

「しかもこういうのって買いに行くの親じゃない普通」

柊妹も聞いてくる。それに対して俺は

「それは家につけば分かると思うよ」

と言い家の方向へと歩いていった。
家に近くまでくるとこなたさんとかがみさんとつかささんは
大きい家を見つけ走っていった。
「うおっ、デカ！！」
「これ家っていうか屋敷じゃない？」
「進くんの家の近くってこんな大きな家あるんだね」
「何言ってんだ？お前ら・・・そこが俺の家だぞ」
しばらく4人が固まった。まぁそうなるだろうとは予想していたことだが・・・・
「とりあえず中に入るぞ」
俺らは家の中へと入っていった。
「家の中も広～い。」
柊妹が家の中に入るなりそう叫んだ。俺は
「キッチンはこっちだ。」
キッチンに入ると柊姉が

「もう、どこかのレストランの厨房ね・・・・」
レストランの厨房なんて入ったことあるのか？
なんて疑問はおいといて、俺は買ってきたものをとりあえず
冷蔵庫に入れた。まぁこの冷蔵庫ってのも厨房にあるやつだけどな。
とそんなこと考えていると
「あれ？誰か来てるのか？進」
俺は振り返って
「佑樹か。ああ、来てる」
「ん？なんだ柊姉たちか。」
「あ、宮川くん。・・・・・なんでいるの？」
俺はその疑問に答えた。
「ああ、俺らは一緒に住んでるんだ。もちろん兄貴と雅人もな」
「なんで？親とかは・・・・？」
柊姉なんかずいぶん積極的に聞いてくるな。
すると入り口の方から声がした。

「親がな、海外で豪遊中なんだよ・・・」

「あ、蓮くん。って、全員・・・？」

柊妹が振り返って蓮くんに聞いた。

「ああ、俺と進の親も雅人の親も佑樹の親も全員一緒にヨーロッパの方へ行ってる。」

「なんていうか最悪な親なのね・・・・・」

柊姉がぼそっとつぶやく。

「だからこうして1週間で家事当番とか決めて回してるって訳だ」

俺は冷蔵庫に物を入れながらつけたした。

「で？こいつら何しに来たんだ？」

「あ、今日の朝のお礼をしようと思って夕食作ろうかな～って思っただけです」

「あ、そうなんだ・・・・」

「それだけど、とりあえずここにあるもの教えるからこっち来てくれ。」

俺は集まってきた4人にあるものを教え、俺の部屋が隣にあることを教え

あとは任せることにした。

第2話（後書き）

キャラの詳しいことにつきましてなど
どんなことでもいいので評価してくれればと思っています。どうか
お願いします。

第3話

俺は部屋に戻るととりあえず漫画の本を手にとり読み始めた。

３０分ぐらいすると読み終わってしまったので今度はパソコンで

ゲームを始めた。なんていうゲームかは聞くなよ？教えたくねぇから

しばらくすると飽きたきたのでゲームをやめｉＰ○ｄで音楽を聴き始めた。

すると扉が開く音がした。俺は扉の方を見て

「おい泉、勝手に入ってくるな。ノックぐらいしろよな」

「むぅ・・・そんなこと言わなくてもいいじゃん！」

泉がむくれながら言った。

「うるせぇな」

「とりあえずご飯できたから来て」

俺は泉にそう言われ一緒に食堂へと向かう。

その途中で泉に話しかけられた。

「ねぇ進くん。進くんたちの親って何歳ごろからいないの？」

「ん～そうだな。今から7年前だから小学3年ぐらいだな」

「ふ～ん、そうなんだ。」

俺がそう話すと横でなにか考えている泉だったが突然

「じゃあこの屋敷には進くんたちしかいないんだよね？」

「ああ、そうだがそれがどうかしたか？」

と聞いたがだいたいは見当がつくな・・・・。

「今度泊まっていい？」

「断る。」

やっぱりか・・・・。こいつの考え方単純だな。

「えぇ～なんでいいじゃん」

「ダメなものはダメだ」

「むぅ・・・・」

俺の一言で次の一手を考え始める泉。

俺は横でそれを見ながら、やっぱりどっかで見たことある気がする・・・・。

どこだろうか？う～んやっぱり思い出せないな・・・。

そんなことを考えていると泉が

「ねぇ、進くん？なんでぼーっとしてるの？」

聞いてきた。俺は一瞬言おうか迷ったが言うことにした。

「いや・・・、前どこかでお前と会ったような気がするなと思ってるんだが・・・」

一呼吸置き、

「さっぱり思い出せねぇんだよ」

すると泉は

「あ～、私もどっかであった気がするんだけど思い出せないんだよねぇ」

と答えた。すると泉の携帯に着うたがかかる。どうやらメールのようだ。

それを聞いた俺は

「へぇ～、Ｇｏｄ　ｋｎｏｗｓ、を着うたにしてるのか・・・」

「うんまぁもう何回も着うた変えてて前には、もってけ！セーラーふく、

とかを着うたにしてたよ！」

それを聞きた俺はやっと悩んでいたものを思い出した。

「あ！」

「へっ？ど・・どうしたの？進くん」

突然声を上げたのに反応し泉がこっちを不思議そうに見ている。

「やっと思い出した。どこかであったような気がしたなと思ったら

お前去年夏のコミケ行ったか？」

「え？あぁ・・行ったよ。それがどうかしたの？」

「昼からどうだった・・・？」

「ええ・・と、そういえば男の子と一緒に行動したような・・・・って

まさか・・・・？」

どうやら気づいたらしいな。

「そのまさかだ。昼からお前と一緒に行動してたのは俺だ」

一瞬黙った泉。

「へぇ～、あのときの人進くんだったんだ」

そのあとそのときのことを話してると食堂に着いた。

中に入るともうすでに全員が揃っていた。

「遅いぞ、進」

「あぁ、悪かったな・・・」

俺と泉は席に着いた。料理はからあげか・・・

そういえば久しぶりだなからあげも。

「いただきまーす!!!」

俺はからあげをぱくりと食べると柊妹が聞いてきた。

「どう?おいしい」

「うん!うまい!!」

その瞬間、柊妹たちから笑みがこぼれた。

２０分後、食事を終え食器を洗っていた。

さすがに皿まで洗ってもらうわけにはいかないので手伝った。

本当は全部俺がやるつもりだったのだが柊姉がどうしてもとういうので

みんなで片付けをすることとなった。まぁみんなと言っても

兄貴たちはやってないんだが・・・・。

で、皿洗いが終わると

「じゃあ、私達は帰るわね」

と言ったので一応玄関まで見送った。

俺はこっちに振り向いて手を振っている４人に会釈して

ドアを閉め家の中に入った。

はぁ、これから本当にどうなるんだろうか・・・・

第3話（後書き）

御意見御感想お待ちしております

第４話

「はぁ、またやってしまったか……」

時刻は午前５時半。パソコンが置かれた机の前に座りながら深いため息をはいた。

パソコンで小説を書いてるのだが性格ゆえかやり始めると時間を忘れてしまう・・・

だから夜通しやってるなんてことも当然あるわけなのだが

今回もそうなってしまった。少しだけ気晴らしにやろうと思っただけなんだが…

１つ大きな欠伸をすると椅子から立ち上がり着替え始める。

今週の家事担当は自分だ。なのでやる気はまったくおきないが

担当なので朝食と弁当を作りに厨房へと向かう。

「あ～だりぃな・・・」

料理しながら独り言を放つが突っ込むやつがいないので悲しくなってくる・・・

それから２０分後弁当と朝食を作り終わった。

メニューは俺と兄貴が

トースト、サラダ、ベーコンなど。

佑樹と雅人は

ご飯、味噌汁、焼き魚、煮物など。

今思えばなんでパン派とご飯派がいんだ。めんどくせぇ・・・

だが俺にはさらに仕事がある。兄貴はいいんだが佑樹と雅人はやたらと朝に弱い。

だから起こしに行かなきゃならないのだ。

まず佑樹を起こしに部屋に行く。部屋に入ると

「おーおー、これはキモチ良さそうに寝てやがんな…」

と言うと声に気づいたのか起き上がる。

「ん？・・・進か。おはよう」

「おはよう、朝食出来てるからさっさと来いよ」

あいさつを交わすと続いて雅人の部屋にいく。

「おー、こっちもキモチ良さそうに寝てんな…」

こっちは声に気づかなかったので近づいていって頭を数回ポンっと叩く。

だが起きる気配まったくナシ。

ふぅと息を吐くとふと横を見やる。そこには４つの目覚まし時計。

おいおい、こんなにあって起きられねぇのかよ…

再び雅人を見ると今度は身体を揺さぶる。すると・・・

「ん・・・んぅ・・・・・・」

やっと目が覚めたようだ。

「あ、ぉはよう…。先行ってて」

俺は言われたとおり先に食堂へ向かう。

そこには兄貴がもう座っていた。俺も椅子に座って待つ。

それから佑樹が2分後に雅人が5分後に集まった。

俺らの食事のルールに

『特別な事情又は本人の意見がないかぎり絶対みんなで食べるべし』

がある。

これは元々親が海外へ行って共同して生活してから出来たルールであり

親がいないからこそ一致団結するために作られたものである。

破った場合、担当週間の量が倍になるなどの罰がある。

さっさと朝食を済ませると食器を洗い、顔を洗う。

その時点で午前7時半。バス停まで行き高校までバスで行くのに30分程度かかるので

もう20分ぐらいゆっくりできる。

ここで生活ルール・・・

『特別な事情又は本人の意見がなければみんなで行くべし』

これもだいたいは上記のとおりだ。

それから20分後・・・バス停へ向かう。

その１０分後バス停に着くとバスに乗り高校へ。さらにそれから２０分後

バスから降り高校へ行く。教室に入ると

「おっはよ～☆」
「おはよう」
「ぉはよう～♪」
「おはようございます」

４人がそれぞれ挨拶をしてくる。

軽く挨拶を返すと

席にかばんを置いていると

「ねぇ、今日って何時間だっけ？」

泉が隣の席に座り尋ねてきた。

「6時間だ。ていうか顔が近いんだよ」

「むぅ・・・ひどいなぁ。そんなんじゃ彼女出来ないよ？」

「うるせぇよ、少なくともお前だけには言われたくはないな」

まだ真新しい教科書を取り出しながら返答する。

そうこう言ってるうちにチャイムが鳴った。

チャイムが鳴り終わるか終わらないかのタイミングで先生が入ってきた。

「みんなおはようさん。さて学校2日目やけど

全員来とるかぁ？1日だるいけど頑張りや。先生もだるいけどな」

そんなこと言っていいのかよ・・・・・・

さてそんなこんなで授業なのだが所詮最初の授業ばっかりなので

これといって教科書など使わない。６時間目は

学活だ。とりあえず学級委員長でもきめるんだろーが

関係のない話だ。と考えてると先生が入ってきた。

「とりあえず１学期の委員長決めたいのやけどあんましメンバーわからへんから

先生が決めてしまうわ。とりあえず委員長は高良！いいか？」

「はい、いいです。」

「みゆきさんも大変だよねぇ。１年のときから委員長やってるとこういうとき

抜擢されやすいんだよねぇ」

「ああ、そうだな」

そのあとは何事もなく委員が決定した。ちなみに俺はなんもなし。

そんなわけで学校帰り、兄貴も佑樹も雅人も委員会に入ったので

俺1人で帰っている。すると

「あ！お～い進くん！！」

後ろから声が聞こえたので振り向くと泉と柊姉、柊妹だった。

「一緒に帰らない？」

「ん・・・まぁいいけど」

そう交わすと歩き始める。すると柊姉が

「他の3人入ったのに進くんは入らなかったんだ」

「いや・・・ホントは別にやっても良かったんだが

やったらやったでめんどくさいしなぁと思って入らなかったんだ」

「ふぅん、なるほどねぇ」

「あ、そういえば進くん土日何か用事ある？」

柊妹が聞いてきた。

「別にないがそれがどうしたんだ？」

すると泉が柊妹の前へ出て

「進くんちに泊まりたいなぁと思って」

「あぁ？なんで泊めなきゃなんねぇんだよ」

怒り気味の声で反論する。泊まったらなにするか分かんねぇしな…

こいつは

しばらく泉と俺は言い争っていたが最終的に言いくるめられてしまった。

「私はダメだって言ったのよ！」

一応柊姉は体裁（ていさい）を保とうとしているがそれを軽くスルーし

「分かったよ・・・、ったく一応兄貴たちに聞いてからだからな」

「「わ～い！ありがとう☆」」

柊妹と泉は同時に答える。

「うるせぇよ、飛び跳ねんな。一緒にいるのが恥ずかしくなってくんだろ」

「ごめんね、まぁみゆきはいないって言うから3人で明日行くね」

こうして泊めることになったんだがなんかいやな予感すんだよな・・・

第４話（後書き）

え～といつ以来だろう・・・（汗
なんかやたらに時間たったねぇ～
次もたぶんこれぐらいだと思うので
気長にお待ちください・・・

第5話

その夜、夕食を食べているときに帰りのに話してたことを伝えた。

3人とも納得してくれたようだ。

その翌日、いつものように朝食をつくり2人を起こしたあと

それぞれ3人が来るまで自由にしていた。

俺はというとさすがに自分たちの部屋にまで入ってこられては困るので

泊まるために用意していた部屋の掃除を済ませる。その途中で

メールが届く。柊姉からだ。『9時に行くね』。

短い文だが長々と書いているよりはまだマシだろう。

柊妹と泉からもメールが届いた。なんで3人もメールしてくんのかは理解できなかったが

泉は『9時に行くね。ゲームいっぱい持ってくよ～☆』

・・・・こいつのゲームはやばそうなのばっかだろうな・・・・

柊妹は『9時に行くね～♪』

ここまではいいのだが文の最後から続いてるこの象形文字みたいな絵文字の羅列はなんだ？

疑問に思いながらも来てから聞けばいいことだと片づけて部屋の掃除を終わらせる。

そして午前9時。

チャイムが鳴り玄関に3人そろって立っていた。

「いらっしゃい」

ドアをあけあいさつする。向こうは

「「2日間よろしくね」」

ここまではよかったのだが！

「エロゲいっぱい持ってきたよ～☆」

まったく・・・こいつはなにいっているんだ・・・・・

柊姉妹も呆れた顔で見ている。俺は

「はいはい～、とりあえず入って～」

3人を入れて準備していた部屋へと案内する。

部屋に着く直前にずっと気になってたことを聞いてみた。

「ところでなんでそんな大荷物なんだ？」

「ん～？それはね～、泊まりの着替えとかも入ってるから」

こなたが答えると隣の２人も

「私たちもこなちゃんと同じだよ」

「私はやめといた方がいいって言ったんだけどね！」

おい、泊まるの前提だったとはいえなんでそんなに荷物多いんだよ！

それと柊姉！否定しても一番荷物が多かったらあんま効力ないぞ？

心の中で途中で３人と合流し客間へ向かった。

「どうでもいいけどなんで使ってない部屋に泊めるの？」

柊姉がもっともなことを質問してくる。俺は

「いやな、俺たちの部屋でやってもいいんだが

物色しそうな奴が1人いるからな」

と横をちらっとみながら説明する。

柊姉も納得したような顔でうなずいてる。当の本人は

「私はそんなことしないよ～！」

とむくれながら手を上にぶんぶん振りながら反論している。

「どうだろうな～？」

兄貴も佑樹も疑っている眼で泉を見ている。唯一雅人が泉を弁護する。

「みんな～、そんな眼で見るのやめようよ」

だがこの一言がきっかけに雅人にも被害が及ぶ。

「なんだぁ～？お前まさか泉のこと好きなのか？」

佑樹が雅人に問う。

「ち・・・・違うよ！ちょっとかわいそうだったから・・・・」

顔を赤くしながら否定するが、佑樹の顔はかなりニヤついている。

先に言っておこう、佑樹はかなりのドSであると。

「ほんとかぁ～？そんなに強く否定するとますます怪しいんだけどな」

さてこれぐらいで助け舟出しておくか。佑樹に近づいていき

「もうやめとけ。そろそろ雅人がかわいそうだ」

と言って呆気にとられていた3人の方に向きを変え

「部屋に荷物置いてこいよ」

「わ・・・分かった」

3人が部屋を出てくと俺ははぁと息を一つ吐き

「まったく・・・、てめぇのドSはなんとかなんねぇのか」

「は？俺はドSじゃねぇよ」

こいつの悪いとこ自覚がないこと。

ドS→自覚がない→たち悪い

これが成り立つ。こいつのドSに被害を食らったやつは結構いる。

「それをドSだと言わなきゃなんになるんだろうな？」

後ろで静かに座っていた兄貴が声を発する。

そうこうしているうちに3人が戻ってきた。

1人はかなりゲームを抱えている。もちろん泉だ。

ちょうどいい。ここにはゲーム機がかなり置かれているから移動する必要はない。

こなた　　Ｖｉｅｗ

はぁ～さっきはひどい目に合ったけどゲームして切り替えよう。

ってあれ？なんで進君出てったのかな・・・

まぁ、いいか。

しばらくゲームをやっていると先ほど出て行った進が人数分の紅茶を持ってきた。

どうやら食堂に行って紅茶を淹れていたらしい。

紅茶を配って、休憩をとる。渡された紅茶の水面に自分の顔が映っている。

その紅茶を机に置き進に目を向け見つめる。

兄の蓮と佑樹にからかわれてる姿からはこの器用さは想像できない。

「泉？おい泉どうした？」

ふと声が聞こえ一瞬驚く。気づくと目の前には進の顔がある。

泉の顔がみるみるうちに赤くなっていき後ろに下がる。

進　ｖｉｅｗ

なんで泉のやつ顔赤くしてんだ。熱でもあんのか？

鈍感だと困るものである。

進は泉のこと心配しつつも

「ゲーム再開しようぜ」

と呼びかけた。泉もだいぶ平常に戻ってるようだ。

選んだゲームは格ゲー。まぁこれが一番ベターだろう。

だが柊姉妹は最初は観戦を希望し雅人はやったことないから最初は無理

兄貴と佑樹はあとでやるとこれも観戦を希望。

消去法で泉が残された。

「泉、とりあえず対戦してくれ」

「うん、いいよ～♪勝負だ～☆」

第5話（後書き）

え～とお久しぶりです。
パソコンが壊れるという最悪な事態が起き
更新が大幅に遅れてしまいました。
急ピッチで仕上げたものなので
かなり適当です。意見等ありましたら
随時お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5034f/

それぞれの道

2010年10月9日13時01分発行